

同窓会報

NO. 31
1984.12

発行——山形県米沢市門東町1丁目1の72号 九里学園同窓会事務局 TEL 0238—22—0091



同窓会主催記念音楽会

学園近況

十二月半ばを過ぎても暖かい日が続き、今年もどうやら暖冬となるのではなかろうか。そういえば、今年の夏は、異常な程の猛暑が続いた。アフリカでは、三年続いた干魃で今年だけでも五百万人の餓死者を出している。毎日何気なく生活している内に、地球(とそれを取巻く宇宙)は大きく変つてゐるのではないか。

地球だけではない。子供(とそれを取巻く世の中)も大きく変貌している。中学生や高校生が様変わりしたといわれるが、よくよく見ると彼等の責任ではない。彼等を取巻く環境が大きく様変りしているのである。大人の責任ではないだろうか。かつて米沢の子供たちは、店に入る時に「アッアーアイ」といつたと聞いているし、私の育った西置賜地方では「カーウ(買う)」といつたようだ。

今、スーパーに子供連れで買い物に行つて、いっさい店の人に挨拶している人はいない。そればかりか、手当たり次第に欲しい品物を勝手にカゴの中に入れている大人たちを見て、子供たちが育つている。そして、レジで金を支払っている親の側には、不思議と子供の姿は見当たらぬし、ほとんど挨拶も無しに店を出る。自動販売機にいたつては、もはや論外である。

こうした中で幼児は育ち、物心ついた高校生の中にも他人に挨拶すること知らない者が増え、他人の品物を平気で寸借することを氣にも留めない者が増えている。これではいけないと、まず自らの生活規範を正そうと生徒会の新しい執行部が立上がつた。全校生に呼びかけて「校風昂揚運動」を開催したのである。健気なことはありませんか。これを私たちは、知らず知らずの内に異常な方向に流されていける大人社会に対する警鐘と受け留めようではありませんか。

(加藤和夫記)



アメリカの農業視察から帰つて

唯、思いのままに……

会長 竹田カツ



豊作という言葉は、何んとなく心の和む言葉です。今秋は特に、置賜地域は心楽しい秋でした。今年も色々な足跡を残して終ろうとしています。

同窓会の一大事業である音楽会も、地域に定着して成功を収めましたが、御苦労していただきました先生方や、役員の皆様、御協力いただきました多くの先生方に、厚く御礼申上げます。

五十九年度の総会も、多数の方々の御参加を得まして、盛大に開催致しました。校長先生の有意義なお話を聞きいたしまして、楽しい時を過ごしました。年代や環境の差を越え、和氣あいあいのふんいきは、同窓会ならではの感を強く致しました。最後に全員がスクランブルを組んで、校歌を合唱した一時は、若き日の思い出の数々や、あの友この友の顔が胸をよぎり、感激も一しおでございました。

もう師走、同窓会の皆様も、何かとあわただしい毎日をお過ごしの事と思います。

私、十一月にアメリカのカリホルニヤの農業を、視察する機会がありました。アメリカの農業については、マスコミを通して、又人々の口伝えに聞いておりましたが、実際に目で見、肌でふれたアメリカは、土地の広大さ、走れども走れども続く綿花の畑、アーモンド畑、果てしなく続くオレンジの畑、それに、極度に雨の少い土地での水利事業の完備には驚くばかりでした。

蓄産農家は、牛を九万五千頭飼育している等、見渡す限り牛の群。夕日が牛の背に入る様な気がする程の広さと牛の数。三百二十kgで入れて、四ヶ月で五百kgにして出すのが、一番よい歩留りだという話や、飼料にしても、単品購入で、栄養士が配合していることや、糞だけでも三億円になるとか。驚きの連続でした。

致しましたが、異国で成功しておられる方々の努力と心の強さには頭の下がる思いが致しました。

農家婦人や消費者婦人と交流も致しましたが、家庭生活の合理化、家庭生活を最高に大切にしている等は考えさせられました。子供の教育にしても、あまやかでない教育であり、國も一体となつて等感銘致しました。例えば、子供に与えたくない物は、自動販売機等も、夜間は屋外に出していない事や、テレビ等の子供向きのものは、土曜の午後に集中している等、様々な配慮にも感心致しました。また、道路でも公園でもチリ一つ無い等、公園や自然を排気ガスで汚さない様にと、マイ

五十九年度 同窓会総会 (米沢)

空梅雨の六月十六日、上野精養軒において、東京支部総会が行されました。

五十九年度同窓会総会が、昨年同様ホテルサンルート米沢において、十月十三日(土曜日)一〇〇名の方々の参加を得て行なわれました。

学校長九里茂三先生に「私の海外旅行から」という演題で公演をしていただきました。

大正から、今春の卒業生まで中広い年令の方々と共に語り、楽しいひとときを過ごしました。最後には手を取り合つて円を作り校歌をしみじみと歌い、同窓の絆をたしかめあいました。

六十年総会予定は次の通りですのでおきそいあわせのうえご参加下さい。

六月下旬の日曜日 当番卒業年度
二十年、二十一年、三十年、三十一年、
四十年、四十一年、五十年、五十一年

東京支部総会

空梅雨の六月十六日、上野精養軒において、東京支部総会が行されました。

今年は二十三年卒業生の、尾田美恵子、長沢愛子、加藤利子さんに当番をしていただき五十名ほどの参加で楽しい集いを持つことができました。旧職員の笹原定純先生、母校からは、加藤次郎、遠藤文子先生他八名に参加していただきました。近年の卒業生は六〇名ほど集まり、大先輩から激励のおことばをいたいたいり、歌を交換したり、楽しい集いとなり、来年お会いできる事を楽しみにお別れいたしました。

カーを乗り入れない様になつてある等は、自然と国を大切にする教育が基本になつてゐることなど、考えさせられる事ばかりでした。

婦人だけの農業視察は始めてだと、テレビのインタビュー等あり、ちょっとびりスター気分も味わいました。

然し、故郷を離れて故郷の良さを知ると言われますが、わずか八日間だけで、國を離れて自分の國の良さも、多く見出す事が出来ました。

農業が今、種々問題になつてゐる時、国民が一体となつて、協同と連体のきずなを強くして、日本人特有の我慢強さと勤勉さを發揮して行くなら、おそれる事はないと思います。

東京在住の皆様どうぞ御参加下さい。



私の海外旅行から

九里茂三

十年ぶりにヨーロッパを訪ねた。アルプスを越えて、雨の中をイスからオーストリアまで、延々と続く高速道路では、左右に迫る壯絶な白銀の山肌に眼を奪われ、或は紺青の湖水に浮かぶヨットの風景に、疲れを忘れる人もいた。この谷間を彩る牧草地と森の見事さは、自然というよりは広大な人工の箱庭という風情で、正に「耕して天に到る」日本の田地より、更に磨きを加えた美しさだつた。思うにこの辺りはかつて茫茫たる原始の山肌であったに違なく、林を伐り開き、荒地を堀り起しては牧草の種を播き、刈りとる毎に地面をならして、ついに二千米の高地にまで及んだのではないかと思われる。また点綴する人家の窓々には、鮮やかな赤い花々が飾られており、また森や湖が各所に散在して、これらの見事な配色がえも云われぬ景観を現わしていた。ヒマラヤやロッキーの豪壮な自然とはまるで違う、人間の創り出した自然の景観が、人の心のやさしさと、その奥底にある不屈の農民魂を感じさせる点で、私はただただ畏敬の念を禁じ得なかつた。

ふり返つて日本の現状を見るに、幾世代にもわたつて耕されつづけた農地は、農民魂の退廃と共に色あせ、山岳も森も川も心無い開発によつて、まさに危殆に瀕しているではないか。我々は日本の父祖達が、この自然を取り組んだ深い心を、もう一度思い返してみる必要がないのか。そして、もつともと永く遠い視野から、子孫に遺す国土の姿を構想すべきではないのかと思つた。

更に私には、この旅の間、心にかかる一事があつた。それはドイツ人と日本人との戦後処理の姿勢の違いである。かつて我々は敗戦を契機として、旧態を見事にかならず捨てたのに比して、ドイツは自らの伝統と文化をし

つようには固執しつづけた。例を教育制度についてみても、日本はアメリカの勧告をうけて、一挙に六三制に転換した。彼らは自らの教育制度を頑なに守りつづけ、容易に変更しようとはしなかつた。いわゆるエリート教育は系統はくずさず、その他は実務的な学習を各層に準備して、両者の間に移動を可能にする程度の修正を加えた程度なのである。日本より更に徹底的な破壊の後処理の中でさえ、彼らの伝統を誇り、時の流れに応じて僅かずつ修正してゆく程度の純重さなのである。

それは例えば建造物についても云えるのであつて、今回ほど修理工事の目につくことはなかつた。石と鉄とコンクリートの見事な建物に、到る所で足場を組んでいる風景が目に付いたが、なるほど取り除くにはあまりにも惜しい壮大な構えなのである。

私はかつて、彼らのこの頑なさをなじつて、いち早く教育の大衆化に進んだ日本の賢明さを謳歌したのであつた。そしてその故にこそ、日本は産業面での発展を急速に実現し、世界の優位に立てたのだと広言してはばかりなかつた。それは今でも誤りではないにせよ、然し今、日本の現実を見るに、余りにも急速な産業面での発展と文明の変容が、果して日本人を眞のしあわせにみちびいたと云えるのであろうか。それに追いつけぬ人間的心情とのアンバランスが到る處に噴出し始めているのだ。ドイツの鈍重な足どりが、見事な地方都市と農村とを結んで、実にしつかりと生きているのと、いずれを可とすべきなのであるか。

今、わが国では、教育の在り方をふくめて、高度経済成長の弊害が見直されようとしている。従来の活力をそがぬ配慮と、然し何よりも心と物とのアンバランスをどう埋めるかが最大の課題であろう。その為には、やはり我々の父祖達の遺した伝統の見直しと、就中、生活文化の再構築に立ち向かうべきではない

ワイフを語る

井上 忠

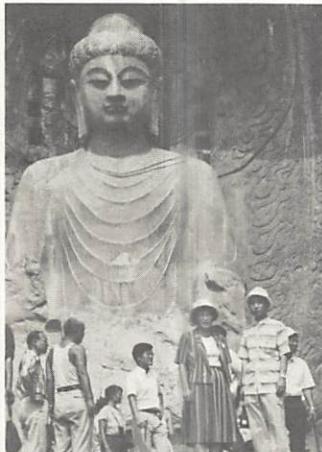
うちのワイフは、したたかで、一人で四つの顔をもつてゐます。一つは職業である「保母」。二つ目は主婦でやつてゐる「ソフトボールチームの『マネージャー』。三つ目はガールズカウトの「副団委員長」。四つ目少々なおざりぎみの「主婦業」。とにかく頼まれると「いや」と言えないう性格の女で、引受けは苦しんでいる。結婚して十九年にならなかつた。石と鉄とコンクリートの見事な建物に、到る所で足場を組んでいる風景が目に付いたが、なるほど取り除くにはあまりにも惜しい壮大な構えなのである。

私はかつて、彼らのこの頑なさをなじつて、いち早く教育の大衆化に進んだ日本の賢明さを謳歌したのであつた。そしてその故にこそ、日本は産業面での発展を急速に実現し、世界の優位に立てたのだと広言してはばかりなかつた。それは今でも誤りではないにせよ、然し今、日本の現実を見るに、余りにも急速な産業面での発展と文明の変容が、果して日本人を眞のしあわせにみちびいたと云えるのであろうか。それに追いつけぬ人間的心情とのアンバランスが到る處に噴出し始めているのだ。ドイツの鈍重な足どりが、見事な地方都市と農村とを結んで、実にしつかりと生きているのと、いずれを可とすべきなのであるか。

今、わが国では、教育の在り方をふくめて、高度経済成長の弊害が見直されようとしている。従来の活力をそがぬ配慮と、然し何よりも心と物とのアンバランスをどう埋めるかが最大の課題であろう。その為には、やはり我々の父祖達の遺した伝統の見直しと、就中、生活文化の再構築に立ち向かうべきではない

失いかけている何かがありました

山形私学教育訪中団に参加して



七月二十七日に成田を発ち、上海、西安、洛陽、北京などを見学して、八月四日の夜に帰つてきました。今年の夏は、異常なほどの猛暑でしたから、しばしの間「日本脱出」が出来ると思つて出掛けたのでしたが、夕やみの上海空港に降り立った時のムツとするような蒸し暑さには、ほんとに閉口致しました。それでも、私にとつて初めての海外旅行でしたから、見るものすべて珍しく、よい勉強になりました。同窓会報の編集をされている係の先生からの強い御要請を断わり切れなくて、気がすすまないままに、旅のアルバムを見ながら拙いベンを執ることになりました。

この夏、思いがけなく母校の先生方と一緒に中国を旅行する機会に恵まれました。そういうのも、娘が母校にお世話をなっている縁で、保護者会の折に九里校長先生からお誘いを受けたのがきっかけであります。

一行は、九里校長先生を団長とする山形県の私立学校関係者だけで、母校の豊鳴先生や伊東先生、家庭科の小松先生も御一緒でしたから、大変お世話になりましたが気楽な旅をさせて頂きました。

昭和三十三年卒業

高木 郁
(旧姓 青木)

(龍門石窟にて)

龍門石窟は洛陽の街から十二キロほど離れた所にあって、雲崗、敦煌とともに、中国の三大石窟の一つに数えられているそうです。伴河の両岸の岩肌に、約一キロにわたって沢山の洞窟が掘られていて、その中に約十萬体の仏像と約三千六百の碑文が残されているということでした。

この地をこよなく愛したという詩人白樂天が時折ここを訪れて活躍したと聞きました。光線の関係で写真撮影は午前中がよいということでお掛けたのでしたが、この日も朝からうだるような暑さで、全長一キロに及ぶ石窟を見て歩くのは、私にとって大変な苦行でした。

科学関係(無線など)や書道、絵画、音楽などに人気が集まっているようでした。これらの学習を通じて、親や兄弟、そして国家を愛する教育を一貫して行なわれているということでした。

子供達のいろいろな踊りや六極拳などを見せて頂きましたが、「花笠踊り」のサービスにはほんとうに感激を覚えました。子供達の生き生きとした輝く瞳と激刺した動作を見て、こそ子供本来の姿ではないかと関心しました。

低学年の学習は、国学、常識、数学といった科目が中心で、高学年になると、それに地理、歴史、音楽、体育などが加わるということでした。課外活動も盛んで、バスケット、バレーボール、卓球などをやっていましたし、文化面でも、



(小学生と共に)

でお仕事、道徳の神様引地先生は今春学園を退かれ九里のアイドル安部友子さんは招湯苑のおかみさんに、という事で結局残つたのは一番駄目な私だけ。さびしいかぎりである。

頭はすっかりはげてしまつたが、ここに来てからの思い出ははげることなく全身にやきついている。その一つにこんな事があつた。卒業して二年目、東京で病にたおれ、東邦大学附属病院に入院。それを知つた沢にいるクラス仲間を代表して沢根（今は

に悟りきつたような生き方は若者にふさわしくない等と勝手な解釈をし人一倍恥をさらし酒におぼれ、時には背のびをしては劣等感にうちひしがれた頃を40を過ぎた今、時おりなつかしむと同時にまたそれが嫌悪感とともになつて自分を苦しめる。

私と一緒にお世話になつた仲間は五人であつたが、あのスポーツマンで温厚で知的な木村先生。秀才の誉れ高かつた柳之助先生はここへまし、考古学者の龟田元三は自己

九里学園に世話をなつてもう20年過ぎて
しまつた。赴任以後10年位いは「私のよう



雜感



今二十歳

婦人自衛官になつてから、ようやく一年が過ぎました。この一年間で私はたくさんの事を学びました。去年の八月に横須賀教育隊に入隊し、約三ヶ月の厳しい教育期間の後、約二ヶ月の初級航空整備士としての学生期間、そして、現在は八戸航空基地で部隊勤務につき、楽しい毎日を過ごしています。

なぜ、私が前の会社を退職してまでこの仕事をついたのかというと中学生の頃からの憧れでした。私は、まわりの環境にすぐ順応してしまって悪い要素までも含んでしまうのです。前の会社では、私は販売員をしていました。会社の仕事も大変でしたがが楽しいこともいっぱいでした。しかし、東京の人というのは、いつもせかせかして、人の事などどうでもいい、自分さえよければという人が少なくありません。そんな自分で自分の大切なものが消えていくて、いつか自分も同じ人間になってしまうのではないかと

北京市の北西約五十キロ程のところにある明朝十三代の墓陵へ行く参道の両側に、甲冑姿の武官や衣冠束帶の文官の石像と、獅子やらくだの石獸が沢山並んでいました。十三陵内の定陵は、万曆帝と二人の皇后の墓とかで、六年の歳月と、当時の国家財政の二年分の銀を費して造営したものということでした。時間の都合でゆっくり見学することが出来なくて残念でしたが、地下二十七メートル奥行き八十七メートルのところにある地下宮殿は五室からなり、天井は梁を一本も使わず建てられており、床や壁に至るまで大理石と

た。仏像の大きいものは十七メートルもあるということで、カメラの視野に収めるのにひと苦労しました。帰りに頂いた冷たいジュースの一杯は生き返った思いがする程おいしかったのを今でも忘れることができません。

(らくだの石獸の前で)

ということで、カメラの視野に収めるのにひと苦労しました。帰りに頂いた冷たいジュースの一杯は生き返った思いがする程おいしかったのを今でも忘れることができません。

いう豪華なものでした。いかに当時の王朝の権勢を誇示するものとはいえ、時間と費用を考えただけでも驚きました。

はじめての海外旅行ということもあって、出掛けるまでは何かと億劫な重い気持ちもありましたが、皆さんのお心遣いで楽しい旅をさせて頂きました。そして何よりも、わずか十日間の旅でしたが、新生中国の人々の生活に接しているうちに、経済大国日本人の失いかけている何かがあることに気がつきました。この感動もいつしか忘れてしまい、そうな気もしますが、時にふれ思ひ出しては生活の反省材料にしてゆきたいと思つてします。



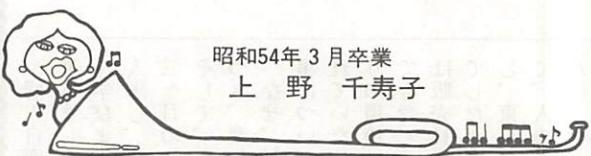
山口) 千恵子が私に「先生、勝見さんにお見舞に行つて」といつて、さらに「これは往復の切符とこれはおみまい、これは先生のこすかい」。「俺だつて金ぐらゐ」と云つてみてもないので良く知つてゐるのだから、そんな事も云わないでよーし、俺がいつて治してくる」といつて東京へ。病院は大森。羽田に近いところにあるのだが、丁度私が行つた時は反安保実行委員会主催の佐藤首相訪米抗議集会があり、駅を降りたら商店街はシャッターをしめ、路上は警官がいっぱい。やつとの思いで病院に着く。予期せぬ私の訪問と仲間の好意にはほをぬらした彼女の姿がいまも脳裏に焼きついている。でも結局彼女は病に勝てずに長井の病院で亡くなつた。このクラスが集まるところ、「墓さいぐべ」と誰からともなく声がかかる。

多かれ少なかれ、私が担任させてもらつたクラスはこのようなやさしい雰囲気のある仲間であつた。いや、私のクラスだけではなくどのクラスにも、つまり九里学園の卒業生全体に云える事であった。と云う事は、今の社会の中に一番欠けている「思いやりの心」、「心のあたたかさ」が九里の卒業生に満ちていたのだと思う。

それにも私は同窓生の皆さんに望む事は、同窓会に対しても一歩関心を深めてほしいという事です。私が出て大学は毎年一回 Home Coming Day というのがあり、卒業生が家族と共に精神的な面に於ても母校にかえる日なのです。皆さんも是非このよさなチャンスに(例えば九里祭、同窓会総会、同窓会主催音楽会)出席され、母校を、政治を、そして人生を語りあつてはいかがでしょう。どうか卒業生の皆さんが豊かな人生を歩まれますよう心からおおいのりしております。

音楽をみましょう

昭和54年3月卒業
上野千寿子



演奏者はなぜにあの様に大きさな「アクション」をするのだろうか。幼い時、とても不思議に思ったことでした。中でも歌い手の表情は奇妙なもので、目線をとんでもない方へと向けて、赤くなりながらうたう男子生徒や、教科書で顔をすっぽり隠す。そんな情景が中学校の頃の歌の試験でしたので、にこやかに、言葉ひとつに表情をさまざまに変えて歌う様子がおかしく思われてなりませんでした。外国人と話をする時、言葉がわからなくともなんとか意志を伝えようと身にしみてわかる様になつてきました。外音楽を表情し伝えるということは身体す

ることは大変なことです。ある時は言葉を選ばなければならぬこともあります。でも難しく飾るのではなく自分とのさまざまな表情と共にうれしいこと楽しいこと、語れたらまたすきなことだと思います。

いわしだんごの もち米蒸し

いわし	1尾	じゃがいも	半個
人参	1cm	キャベツ	30g
卵	大さじ1	牛乳	小さじ1
こしょう	少々	ガーリック	少量
もち粉	50g		

- ①いわしは、まな板でたたき刻んでから、すり鉢に入れてなめらかにこする。
- ②じゃがいも、人参はおろし金ですりおろし、キャベツはみじん切りにしてすり鉢に入れ塩、こしょう、ガーリックで調味する。
- ③すり鉢に卵、牛乳、パン粉も加えます。
- ④それを2~3cm大のダンゴにまるめる。
- ⑤もち米はあらかじめ水浸しておく。好みで浸け汁に食紅を入れた中に浸しておいてもよい。それをよく水切りして、
- ⑥④のダンゴの表面にもち米をまぶして、蒸し器で20分間ほど蒸します。

見なれた材料で
目さきを変えて
みませんか……

大志田記

かぼちゃきんとんの 菊花揚げ

かぼちゃ	250g	砂とう	小さじ1杯
塩	小さじ1/2杯	卵白	1個分
チーズのみじん切り	大さじ1杯		
小麦粉	大さじ1杯	はるさめ	50g

- ①かぼちゃは蒸すかゆでるかしてからつぶします。
- ②そこに調味料とチーズを入れて、3cm大のダンゴにします。
- ③ダンゴの表面に小麦粉、卵白、はるさめの順につけて、160°Cの油で揚げます。色づかないように揚げるのがこつです。



荒沢貞伸先生訃報

去る八月一日、旧職員荒沢先生の訃報

をお聞きし、あまりの突然のこととに茫然といたしました。先生は昭和二十年より三十九年まで、理数科の教員として本学園に勤務。終戦後の混乱を極めた時代に、若干教員のホールとして、また理数科に堪能だけでなく、音楽等の趣味も豊か。共に歌い、ピアノ、ギターに親しむ等、一身に生徒の思慕を集め活躍されました。本校を退職後以来三十年、置賜学園の教官として青少年の育成に情熱を傾け、この春退職されました。埼玉に居を移し、余生をとお考えの折りも折、病を得急迎されることはまことに残念でした。謹んで御冥福をお祈りしたいと思います。（加藤孝記）

編集後記

同窓会名簿第二巻（昭和五十三年）発行以来そのままでしたが、住所変更、卒業生の追加等を校正したいと思い準備を進めています。クラスの方々、及びご近所の方で変更された方をご在知の方はお知らせ下さい。また紙面の都合で載せられませんでしたが、支部の総会や学年会、クラス会等が盛会裡に催されたというご報告いただいております。この会

べてをつかい、それこそ顔の皺を一本一本動かして歌つてゐるように心を伝えようとは駄ではない「アクション」をしていただけます。その表情をうかがつてますとその方の人格までもが伝わってきます。人に心を伝えるということはなんてすてきなことなのだろうかと思ひます。口先だけの伝達ではなく口をひらくことによつて、鍵盤に指が触れることによつてさまざまな思いが飛びかっています。音楽に限らず伝えるといふことは大変なことです。ある時は言葉を選ばなければならぬこともあります。でも難しく飾るのではなく自分とのさまざまな表情と共にうれしいこと楽しいこと、語れたらまたすきなことだと思いま

九里学園同窓会 昭和59年度予算

◆収入の部	
繰入会	598,213
終身会	327,000
受取	981,000
会員受取	1,160,000
雑収入	10,000
合計	3,076,213

◆支出の部	
運営費	(446,213)
事務費	50,000
通信費	50,000
会議費	50,000
慶弔費	70,000
人件費	150,000
激励費	60,000
雜費	16,213
事業費	(970,000)
報酬	300,000
会員証	20,000
音楽会	0
研修会費	350,000
名簿準備金	250,000
予備費	50,000
基本金	500,000
受取金	1,160,000
合計	3,076,213